

探求のパラドクスと想起

松井貴英

本論文は、メノンの提示したパラドクスに対するソクラテスの批判が適切なものか、単にメノンとの立場の違いを述べているに過ぎないものを検討する。この問題の検討に際して、想起の実演がパラドクスへの適切な批判となり得ているのであれば、どのような点でこのパラドクスを批判しているのか、あるいは適切な批判となり得ていないとしても、想起の実演の持つ意味は何かを考察する。そして、ソクラテスの対話の、あるいはプラトンのなす問いの目指す先は何であるか、より広い意味では、知る事、知っている事、知識を獲得する事とはどのような事かを探る試みの端緒となるものである。

一 探求のパラドクス

プラトン『メノン』の冒頭、メノンは「徳を教えることはできるか、教えることはできずに訓練により身につくものなのか、それとも生まれつき素質か、それとも他の方法により備わるのか」と、ソクラテスに問う(70a1-4)。この問いに対しソクラテスは、「徳が何であるかを知る前に徳がどのようなものであるかを知ることはいできない」旨の発言をする(71b1-8)。徳の性質を探求するためには徳の定義の探求が必要であると、ソ

クラテスとメノンは「徳とは何か」の探求を始める。しかしメノンは、徳とは何かを述べる何度かの試みのいずれもが困難に行き着いた末に、ソクラテスに対して、

(A)「ならば、ソクラテス、あなたはどうかやってそれが何であるか全くもって (το παρ᾽ ἄνω) 知らないものを探し求めるのでしょうか？ というのも、あなたは、あなたが知らないものうちのどのようなものを目標として、探し求めるつもりですか？ また、もし、首尾よくその探求の対象にたまたま出会うとしても、どのようにしてあなたは、それがあなたの知らなかったものであることを知るのでですか？」 (80d5-8)

と発言し、「知らないものを探求することはできない」というパラドクス（以降、探求のパラドクスと呼ぶ）を提示する。メノンによるこの発言を聞いたソクラテスは、

(B)「メノンよ、私にはわかるのだ、君がどのようなことを言おうと思っっているのかを。君は気づいているかね、きみを取り上げたものが、いかに論争好きな人の議論であるのかを、それは、人は知っているものも知らないものも探求すること (ἔρευνᾶν) はできない——というものだよね？ というのも、少なくとも知っているものを探求することはないだろう。というのも、知っているのだから、それを探求する必要はないのだ。また、知らないものについても、何を探求するかを知らないのだから、探求することはできないのだ。」

(80e1-5)

と、このパラドクスを言い換える。その後で、知らないものの探求が可能であることを、メノンに仕える奴隷の少年との想起の実演により示す(81c5-86c2)。そして、実演において少年が、ソクラテスに提示された幾何学の一例題の正解に辿り着いた後、ソクラテスは

(C)「少なくとも他のことについては、その言論に関して、それほど確信をもてないのだ。しかし、それが何であるか知らないものを探求しなければならないと思う方が、知らないものを発見することもできなければ探求するべきでもないと思うよりも、より良くあり、より勇敢であり、より一層怠惰であることがない」と、もし可能であるなら、言論の上でも実際の上でも、強調したい」(86b-c2)

と述べる。

探求のパラドクスは、何の議論も説明もなく唐突に出されたもの¹ではなく、「徳とは何か」についての対話を続けるうちに困難に陥ったメノンが、ソクラテスに対し述べたものである²。探求のパラドクスは、論争好きな人々³が好む命題であり、ソフィスト的な思考による発言であるとも考えられよう(81a1-2)。しかし、メノンにはソクラテス的な対話や探求についていくだけの能力がなく⁴、メノンがこの時点で苛立っているとしても、「この命題は、ソクラテスとメノンの二人共が、徳について全く知らないのに、どうして探求することができるのか?という自分達の置かれた状況をメノンが素直に言い直したに過ぎない」という *Nehamas*⁵ の解釈は妥当であろう。なぜなら、「徳が何であるか全く知らない」ことを自認するソクラテスと、ソクラテスによって徳が何であるかを答えられなくさせられた(実際は、徳について自分の無知を知らし

めさせられた) メノンの状況は、まさにこのパラドクスの状況だからである。

—— το παράδοξον の問題 —— 知っていることと知らないことの間にあるもの——

パラドクスを述べる際、メノンは「全くもって (το παράδοξον) (80d6) という語を用いるが、ソクラテス
は用いない。この点について Nehamas⁶⁾ は、ソクラテスの発言はメノンのパラドクスと何ら異なるところ
がないとして、この語をソクラテスの発言に補わなければならないと解する。しかし、この Nehamas の解釈
は適切ではないかもしれない。なぜなら、ソクラテスがパラドクスを述べる際に、意図的に το παράδοξον とい
う語を用いなかったと解しうる余地があるからである。その根拠を、『メノン』冒頭からのソクラテスとメノンの
対話と、想起の実演に見ることができる。70a-80d において、ソクラテスとメノンは「徳とは何か」を探求
し、結局アポリアに陥るが、両者とも、徳についての何らかの思いなしを持っていて、それを用いて対話して
いる⁷⁾。ソクラテスがこのことに気づいているとすれば、認識において徳について完全に知っているか全く
知らないかの中間の状態があることに気づいていることになる。また、想起の実演において、奴隷の少年が幾
何学の一例題の正解という真なる思いなしを獲得したことについて、ソクラテスが想起による成功的探求とみ
なしていることから、ソクラテスが、知——不知の中間の状態があり、不知の状態からそのような真なる思い
なしを獲得した状態に至ることをも、知識獲得のための長い道程の過程であるとみなしていることがわかる。

それゆえ、確かに、探求の末に、徳について全く知らない二人がどうして探求することができるのかという
自分たちの置かれた状況で、メノンが探求のパラドクスを提案したことを考慮すれば、メノンのパラドクスの

意図は、全くもって無知であるがゆえに探求できないという点にあるが、それに対して (B) における「知っているものも知らないものも探求できない」というソクラテスの発言は、知—不知の中間の状態があることを認めた上で、この知識観を先取りして、「全くもって」と言わなかったと解せられるのである。それゆえ、目標にするものがわからないから探求を開始することができないというメノンの発言は、ソクラテスにとっては妥当でないのである¹⁰⁰。ここで、メノンの知識観に基づくパラドクスへの批判に、ソクラテスの知識観を用いる事は不適切だとする反論が予想される。しかし先述のように、『メノン』冒頭からメノンが語る徳についての言明が、知識でなく思いなしである事に注目すれば、徳についての何らかの思いなしを持つメノンが、知と不知の中間の状態を認めないとする知識観を持っている事の方が、不適切であるといえる。

一—二 定義の優先性と成功的探求に関する問題

ソクラテスは『メノン』冒頭で「それが何かを知る事なしにそれがどのようなものであるかを知る事はできないのであり、それは、徳とは何かを知る前に徳とはどのようなものかを尋ねるのは、メノンが誰かを知らないのにメノンがどのような人かを尋ねるのと同様によくないことだ」(71b1-8) と述べる。70a-80d でのソクラテスがメノンに対し徳についての幾らかの信念を示していることを踏まえつつ、Scott は、この命題を、(X) 「徳の定義を知るまで徳について全く何も知ることはできないと解釈すべきではない」と考える。この命題では、定義的な知識が優先的に必要であることが強調されていると Scott は指摘する¹⁰¹。すなわち、Scott は、この発言を、性質を知るためには定義が必要だという定義の優先性が問題となっていると解する。また、定義

は正しいだけでなく説明に役立たねばならず、探求の対象でなく対話者間で同意された言葉で探求が進められねばならない¹⁰⁾。しかし、探求の対象についての定義的でない特徴は、対象の定義の知識に基づいてのみ発見されるのだから、(Y)「探求において確かな出発点である対象の定義の知識を持っていなければ、定義を与える条件に合うことはできず、知識を獲得する望みもない」¹¹⁾ことになり、(X)と(Y)が折り合わないという問題が生じる。

この問題について Scott は、パラドクスの示す問題を探求の前提となる定義を特定することの不可能性であるとは解しない¹²⁾。Scott は、探求のパラドクスを「発見はできないが探求は可能である」と解する。(B)で「発見する (επιόκειν)」でなく「探求する (ζητῆν)」が使われている様に、探求のパラドクスが全ての探求を除外するならば、発見に終わる探求はなおさら除外される。確かに、完全に知っているか全く知らないかの二者択一であるならば、探求者が探求の対象に行き当たろうが行き当たらないが、探求は不可能である。しかし探求の対象を、完全に知ることなく真なる思いなしとして部分的に把握し、知識と区別できれば困難は解決される¹³⁾。真なる思いなしを持っている状態では、探求の対象を知っていなくても、真なる思いなしを探求の手がかりとすることは可能だろう。また Scott は、(B)における「探求する」の語の使用の事実と自身の解釈は折り合わないが、(C)は(B)と同じことを述べているとすれば、(C)は探求の不可能性でなく、成功的な探求への言及であり、元々の問題が記されている信頼できる発言と解すれば、(B)には単に僅かな不正確さがあり、(B)では「探求する」よりは、「発見する」の方がより適切であったと解釈する。

Scott の解釈は、定義の優先性が問題とされている点、真なる思いなしへの言及の点、「探求のパラドクス」が成功的探求の不可能性を指摘する側面を持つ事に言及している点は妥当である。しかし、問題が二点ある。

第一の問題点は、(B)「探求する」を「発見する」とする読み替えへの疑問である。このような読み替えがなக்கும்もパラドクスを解決できれば、それに越したことはないだろうし、このように読み替えることは、次の問題点を見えにくくしている。すなわち、Scott は、探求のパラドクスが、成功に終わる探求に関わるパラドクスであることを指摘するのみで、探求の開始時点に関わるパラドクスである事を指摘していない。すなわち、探求の対象の特定の問題に対して、解答を与えていないのである。探求のパラドクスを提出するまでのメノン は、ソクラテスとの対話によって、徳について無知であることが暴かれ、徳を定義することのできない状況に陥ったのである。メノンが提出したパラドクスと、ソクラテスのパラドクスを正しく解するためには、メノンの陥ったこの状況を考慮に入れねばならないだろう。

一―三 探求の対象の特定に関する問題

探求のパラドクスに関わる問題について、White は次の様に述べる。探求の対象の発見のためには、探求の対象の特定が必要であるが、そのためには、どうやって正確に探求の対象を特定するのか?という疑問が起こる。しかし、対象の特定のためには対象を発見しなければならぬ、しかし対象の発見のためには対象を特定しなければならぬ……、という循環が生じるのではないか、そしてこれがパラドクスを与える困難であり⁽¹⁴⁾、想起にも探求の対象の特定に関する同様の困難が言えるので、想起がパラドクスを解決するものだと考える余地はない⁽¹⁵⁾。

White の提出する問題の解決のためには、想起説の議論の直後に展開される、仮設法の議論にまで考察の範

圏を広げなければならないだろう。仮設法に言及することで、探求の開始点に関わるパラドクスに対しても、成功的探求に関わるパラドクスに対しても、探求が可能であることを示すことができよう。『メノン』において仮設法は、仮設から出発する探求の方法の実践の一例として示されている。ソクラテスがメノンに対して、

(D)「少しだけでも私に対する支配を緩めてくれないだろうか、もしそうしてくれるならば、徳は教えられるものかそれとも他の方法で得られるものかについて、仮設を立てて探求を進めることを認めてほしいのだ、私が仮設から探求すると言うのは、ちょうど幾何学者たちがよく用いる、あの方法なのである」(80a1-b)

と述べるように、仮設を探求の前提として立てる際には、その仮設を立てる事を、そしてその仮設から議論を始める事を、対話の相手に同意してもらわなければならない⁽¹⁶⁾。そして、立てられる仮設は、無条件に認められるのではなく、限定的に用いられ⁽¹⁷⁾、仮設の前提は「その場限りの前提」として⁽¹⁸⁾、恣意的に⁽¹⁹⁾用いられる。したがって、定義を探求の前提として任意に恣意的に立て限定的に用いて、そこから出発した探求が失敗に終わるとしても、探求が可能であることは示される。逆にいえば、探求の対象を特定する事ができないというWhiteの提出した問題に対しては、探求のために仮設として定義を前提として任意に恣意的に限定的に立てるとしても、探求は可能であるといえる。その際、成功に終わる探求であれば前提として立てた仮設が適切だったといえ、失敗に終わる探求であれば前提が不適切だったのか、あるいは成功しないはずの探求であったといえよう。もちろん、仮設から出発した探求は、結論もまた推定的なものであるけれども。

本論文では、仮設法に関する詳細な検討までは行わない。しかし、プラトンが、パラドクスが孕んでいる問

題として、探求の対象の特定に関する問題について意識していたと考えることは、『メノン』において想起説の議論の直後に仮設法の議論を展開している事を考慮すれば、不自然ではないだろう²⁰。しかし、ここまでの議論では、仮設法がパラドクスへの批判になりうると言えるのみであり、想起説がパラドクスへの妥当な批判かどうかという問題は残されたままである。なぜなら、プラトンの意図は、仮設法によってではなく想起によってパラドクスを批判する事だったからである。したがって、想起の実演も仮設法と同様、探求の対象の特定の問題を解決するための有効さを備えていれば、すなわち、探求のパラドクスに対する答えとして提出された想起の実演を、仮設法のひとつの適用例として解せられれば、探求は可能であるという答えを与えることができる。

一 探求のパラドクスと想起の実演

ソクラテスは、「一辺が2プウスの正方形の二倍の面積の正方形の一辺の長さはどれくらいか？」という幾何学の問題を奴隷の少年に問う(82d5-7)。少年は、誤答を出し続けるものの、ソクラテスの質問に答えていきながら、最終的に正解に到達する。この例題は、当時のギリシャの数学者の間では一般的な知識であり、当時の学校の教育では名の通ったものである²¹。そのような問題であっても、幾何学の知識を全くといっていい程持っていない奴隷の少年が独力で正解を発見する事は、殆ど不可能である。なぜなら、この問題は、面積の問題から線形通約不能性(いわゆる無理数)の問題にまで通じていかざるをえない問題であり²²、正解は、有理数を用いた計算では導き出されえないからである。

ソクラテスと少年により、正方形がどのような図形であるか、そして正方形の面積をどのように求めるかが最初に確認され(82b9-d4)、これらの前提を基に、実演が始められる。序盤、少年は誤答を答える。幾何学についての知識を殆ど持たない少年は、当然、通約不可能な数の存在を知らない。正解となる対角線の長さは、有理数のレベルの思考では決して正解を導き出せないのだから、少年は正解を全く知らない状態にある。そして、このような状態の少年は、たとえ仮に対角線(というものがあるという事実)に辿り着いたとしても、独力ではそれが正解であるかどうかわからない状態であると考えられる。

探求のパラドクスと想起の実演の違いは、ひとつには、探求に行き詰まり「徳とは何か？」の問いに答えられず、自身の状況を、ソクラテスとの対話により痺れてしまい痺れることで何も得られなくなったとするメノン(79e7-80b7)と、ソクラテスとの対話によって痺れてしまった少年が、痺れることで何かを得たこと(84a3-b8)の違いとしても現れている。少年の状態は、実演の開始当初は「知らないものを探求することができない、そして仮に正解に辿り着いたとしても、それが正解であるかどうか気づかない」という、メノンが提示したパラドクスの状態に合致する。しかし、そのような状態にある少年は、想起によって正解に辿り着く。その意味で、ソクラテスは、パラドクスへの反例を示している。しかし、単に反例を示すのみでは、パラドクスを適切に批判しているとはいえず、想起の実演が探求のパラドクスを適切に批判している事を示す必要がある。

ソクラテスの発言(D)「私が仮設から探求すると言うのは、ちょうど幾何学者たちがよく用いる、あの方法なのである。」からも、仮設(hypothesis)に基づく方法は、元々幾何学の探求の方法であるとわかる。幾何学者が行う、前提として立てたある仮設に基づいて、目の前に示された問題を解き幾何学の研究を進めていく方法を、

ソクラテスは採用する。想起説の議論の直後に、「再びメノンが「徳は教えられうるか」を問題にし、対話は振り出しに戻ったように思われるが、『メノン』冒頭とは異なり、ソクラテスが仮設法を持ち出すことで、探求の前提として仮設を立て、仮設から議論を始め、探求を試みていく。

ここで注目すべき事は、仮設法がどのようなものであるかではなく、プラトンが、想起の実演の直後に仮設法の議論を展開させている点である。実演は、幾何学の一例題を用いて行われたものであった。もちろん、幾何学に関して無知である少年との対話であるがゆえに、実演では幾何学の専門用語は用いられなかった。しかし、(D)が述べられる直前に行なわれた実演で、ソクラテスが幾何学の一例題を用いた事は、ソクラテスが、幾何学において仮設に基づく探求が行われる事を、実演がなされる時点で、ある程度意識していたと推測できる可能性を与えるものである。実演の冒頭でソクラテスが、少年と共に、正方形の諸性質や面積の求め方を確認した事が、仮設の前提を置いた事になると考えることもできるだろう。そして、奴隷の少年は、ソクラテスによって最初に示された仮設の前提（正方形とは、二倍とは、面積とは、辺とは）を用いて、探求の対象となる問い（「一辺が2ブスの正方形の、二倍の面積の正方形の一辺の長さは？」）を任意に恣意的に限定的に定めるけれども特定する。それらは当初は曖昧で漠然としていたかもしれないが、ソクラテスと共に実演を始めていく。この解釈が適切であるならば、ソクラテスは、想起の実演を行う時点で既に、White が指摘するような探求の対象の特定に関わる問題について、その問題の解決の手掛かりとなる仮設法を意識し、実演において、この問題の解決の糸口を仄めかしているといえるだろう。

二二 想起説はパラドクスに対して説得的か？

三十一 想起説はパラドクスへの返答になっていないのか

Fine⁽²³⁾は、プラトンが「知らないものを探求できない」というパラドクスを否定し、探求の対象についての全ての知識に欠けているとしても、それを探求することができると主張している事を認める。しかし Fine は、想起説はパラドクスに対する直接的な返答ではなく、探求に際して人は偽なる思いなしを越えて真なるものを求めようとするというような、ある事実を説明するために導入されているがゆえ、それだけではパラドクスに対する十分な答えを与えていないと解する⁽²⁴⁾。また Fine⁽²⁵⁾は、プラトンは奴隷の少年が探求の対象を知っているとは述べていないと解し、生まれる前に知識を持っていたことは、対象を現在知っている事ではないとする。それゆえ、このことを根拠として想起説を「知っているものを探求することはできない」という命題の否定によってパラドクスに対する直接の返答であるとするような解釈を、Fine はしない。

Fine の解するように、想起説は探求のパラドクスに対しての直接的な返答には見えない面がある。メノンのパラドクスでは、探求に当たったの認識は、知っているか知らないかのみである。それに対して想起説では、認識の状態には、先述の通り、知っていることと知らないこととその中間の状態がある。この知識観の相違がパラドクスと想起説の間に埋められない溝を作っているとすれば、想起説はパラドクスに対する批判とはならないだろう。

冒頭の(C)は、実演終了後のソクラテスの発言である。ソクラテスが探求のパラドクスに批判的であることは、これまで見てきたように明らかであり、(C)のソクラテスによる探求の勧めは、プラトンの哲学に向かう姿勢をよく表している。しかし、Black²⁶⁾は、この発言は知らないものを探求しなければならないという信念を持つことの望ましさのみを述べたものと解する。また Sharples²⁷⁾が指摘するように、(C)の「少なくとも他のことについては、その言論に関して、それほど確信を持ってない」(86b6-7)の「他のこと」が何を意味するのか?という問題がある。Sharplesは、魂の不死性の理論のみを指しているのか、あるいは想起の実演を基にした知識について主張された事柄の詳細についてなのかと、幾つかの候補を挙げている。また Bostock²⁸⁾は、奴隷の少年から誰も正解の知識を引き出していないこと、少年が真なる思いなしだけでなく偽なる思いなしを持っていたことについても指摘した上で、数学は厳密な証明としては適切な例であるように思われるが、『国家』(511、533c)において数学は哲学的探求には至らないと述べられているように、『メノン』や『パイドン』においても、プラトンは数学に関して同様に考えていると解する。その上で、プラトンにとっては道徳的なものの探求が最も哲学的な探求であると考えられるので、86b6-7では、想起が議論の全体における本質的部分であることに確信を持っていないことが述べられていると解する。

しかし、ソクラテスが想起説や想起の実演に自信を持っていないと解釈することは、妥当ではないだろう。もしソクラテスが、知っていることと知らないこととの間の状態を認めない知識観を持っているとすれば、知と不知の中間の状態があることを前提とする想起説や想起の実演は、ソクラテスにとって、矛盾したものになるだろう。しかし、ソクラテスは、知と不知の中間の状態を認めているのであり、想起説も想起の実演も、ソク

ラテスの認識論の体系において矛盾するものではない。それゆえ、ソクラテスが想起説に自信を持っていないとは考えられないのである。そして、このことから、知と不知の中間の認識状態の対象に幾何学があり、そしてその中間の状態において幾何学を探求の対象とするような *ἁπλοία* (悟性) のレベルの認識に、知識を獲得する道程における積極的な意味を持たせることも可能となる²⁹⁾。それゆえ、このように、想起説の認識論的側面には自信を持っているソクラテスが、(C)において確信が持てないと述べた「他のこと」については、魂の不死性やそれについて説明する際に述べられたミュートスであると考えることが妥当であろう。

四 まとめ

ここまで来てなお、プラトンが想起説と仮設法の関係を意図していたかどうかという問題が残る。意図していなかったのなら、単に両者が重なり合う事があるに過ぎないと言えるのみだろうし、意図しているなら、両者がどのような関係にあるのか、そして、想起に必ず *ὑπόθεσις* に基づく探求が含まれるのかどうかという、更なる疑問が残る。しかし、これらの問題が残るとしても、プラトンが、探求のパラドクスに対して、想起の演進を用いて、任意の前提から出発して探求を進められることを示した事は積極的に評価されるべきである。そして、この解釈に反論が出されるとしても、我々が採りうる解釈は、(C)は探求のパラドクスに対するソクラテスによる態度の表明であり、その結論になっているという事である。(C)は、Scott³⁰⁾が述べているように、知的怠惰に対する厳しい攻撃と、メノンを厳しい知的労働へと駆り立てようという試みが現れているものであり、想起は、このような種類の知的怠惰に対する解毒剤としての機能を果たすものである。

- (1) Nicholas P. White, 'Inquiry', *Plato's Meno in focus*, Routledge, 1994, pp.153-154
 - (2) Dominic Scott, *Recollection and Experience——Plato's theory of learning and its successors*, Cambridge University Press, 1995, pp.26-27
 - (3) Klein, *A Commentary on Plato's Meno*, the University of Chicago Press, 1978, p.62, p.91
 - (4) Klein, p.92; R. S. Bluck, *Plato's Meno*, Cambridge, 1961, p.125
 - (5) Alexander Nehamas, 'Meno's Paradox and Socrates as a Teacher', *Virtues of Authenticity:Essays on Plato and Socrates*, Princeton University Press, 1999, p.7
 - (6) Nehamas, p.9
 - (7) 70b, 71c, 73c-d, 76c-e
 - (8) 何かを知っているか知らないかの二項対立の構図を捉えているように思われる。これにソクラテスはその中間の状態を認めようとする。
- Meno; R. Kraut(ed.), *The Cambridge companion to Plato*, Cambridge University Press, 1992, p.204

- (6) Scott, p.27
- (10) Scott は 74b3-75c7 から、この論点を導いている。
- (11) Scott, pp.27-29
- (12) Scott, pp.29-31
- (13) 同様のことを、*Five* は次のように解する。確かに、完全にある探求の対象について知らないなら、その対象の観念を持つていないことになる。その場合、探求は不可能であるが、その対象について全く無知であることは、その対象の知識を欠いている唯一の状態ではない。すなわち、その対象についての全ての知識を欠いているけれども、その対象の幾つかの(真なる)思いなしを持っているのであり、おそらくそれら思いなしは、探求のためには十分なものである。知識と比べて欠ける所がある(真なる)思いなしを持つていることは、知識を欠いている一つの状態である。しかし、この状態は、探求を不可能にするような知識の欠如の状態ではない。それゆえ、「知らないものを探求することはできない」というパラドクスは間違っている。なぜなら、ある探求の対象がどのようなものであるかを知るためにその対象が何であるかを知らなければならないとしても、その対象がどのようなものかの真なる思いなしを持つたために探求の対象が何であるかを知る必要はないのであり、おそらく信念は探求を導くことができるからである。(p.206)
- (14) White, pp.153-155
- (15) White, pp.162-167
- (19) Alpaid Szabó, *The Beginnings of Greek Mathematics*, D. Reidel Publishing, 1978, p.234
- (17) Bluck, p.76
- (81) Szabó, p.234

- (19) Szabó, P.236
- (20) 想起の実演と仮設法を関係付ける解釈に「J.T. Bedu-Addo, 'Recollection and the argument 'from a hypothesis' in Plato's Meno', *The Journal of Hellenistic Studies*, vol.CIV, 1984, pp.1-14」を参照せよ。
- (21) Szabó, pp.69-71
- (22) Szabó, pp.93-94, pp.189-190
- (23) Fine, p.209
- (24) Fine, pp.213-214
- (25) Fine, pp.223-224
- (26) Bluck, p.318
- (27) R. W. Sharples, *Plato Meno*, Alis & Phillips, 1985, pp.156-157
- (28) David Bostock, *Plato's Phaedo*, Oxford University Press, 1985, pp.111-113
- (29) 松井貴英「想起と数学——プラトン『ハイドン』における等しきそのもの」、『日本哲学会(編)『哲学』五五号、二〇〇四年、一四三—二五五頁を参照せよ。
- (30) Scott, p.32